

令和 7 (2025) 年度 校内研究実施計画書

学校教育目標	自他を尊重し、ともに学び、高め合う子の育成
研究主題	対話を通して、学びを深め合う子どもの育成 ～子どもも教師も対話から得る楽しい学びを目指して～
教科 領域等	算数科

1 主題設定の趣旨

(1) 児童の実態より

本校の子どもたちは、提示される課題に対して、考えようと取り組む子が多い。わからないことがある時には、教師や友だちに助けを求める姿もみられる。昨年度のスタディチェックの結果や、普段の様子から、1 学級の中に、A 層から D 層の子どもが混在しており、D 層の子どもたちには、学校だけではなく、家庭での環境にも支援が必要な子が多い。また、年々外国につながりをもつ子も増えており、その中でも、日本語指導を必要とする子も多くなってきた。昨年度より「対話を通して、学びを深め合う子どもの育成」をテーマに研修を行ってきた。全校で対話を取り入れたことで、子どもたちがより意欲的に学ぼうとする姿が増えた。1 学期と 3 学期にとったアンケートでも、「対話をして自分の考えが広まったり、深まったりしたことはありますか。」という質問について、「はい」と答えた児童は全校で約 10% 増えている。(高学年 62.6%→70.9%、低学年 46.8%→61%) 特に、小グループでの対話では、学習課題に対して様々な解決方法で考えようとし、「箕田の話したいわ、聞きたいわ」の 1 つでもある「わからないことを一緒に悩む」姿も増え、自分たちから小グループで対話することを申し出ることもあった。また、誰と対話をするかを子どもたちが選択し、課題解決のために自分に何が必要かを目的をもって取り組むことができる子もいた。

しかし、課題として、お互いに意見を言い合って終わったり、課題を解決した子が一方的に伝えて終わったりと、対話として成立しているとは言えない場合も少なくなかった。この実態の背景として、語彙力の不足、読解力の低さ、学級の横のつながりの薄さが考えられ、基礎学力の定着と仲間づくりの両方が必要だと考えられる。非認知能力においても、「自制心」や「やりぬく力」を意識させることで、学ぶ力になるのではないかと考える。また、子どもたちは、対話をすることで学びが「深まった」と肯定的に考える子がどこに目標をおいていたかが定かではない。

子どもたちがよりよい対話をするためには教師の対話をする力も必要だと考える。今年度も、答えが明確であり、課題解決に向けてよりよいものを考え合う姿が想像しやすい算数科を窓口を設定し、対話を通して、学びを深め合う子どもの育成を研究する。

(2) 学習指導要領の位置づけより

平成29年3年告示の小学校学習指導要領には、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、次の事項の実現を図ると明記されている。

(1) 基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めること。その際、児童の発達の段階を考慮して、児童の言語活動など、学習の基盤をつくる活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、児童の学習習慣が確立するように配慮すること。

また、主体的・対話的で深い学びの実現に向けての授業改善については、

特に、各教科等において身に付けた知識及び技能を活用したり、思考力、判断力、表現力、人間性等を発揮させたりして、学習の対象となる物事を捉え思考することにより、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方（以下「見方・考え方」という。）が鍛えられていくことに留意し、児童が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること。

と、されている。

算数科の目標

知識及び技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
数量や図形などについての基礎的・基本的な概念や性質などを理解するとともに、日常の事象を数理的に処理する技能を身につけるようにする。	日常の事象を数理的に捉え、見通しをもち筋道を立てて考察する力、基礎的・基本的な数量や図形の性質などをを見いだし統合的・発展的に考察する力、数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭を的確に表したり目的に応じて柔軟に表したりする力を養う。	数学的活動の楽しさや数学のよさに気づき、学習を振り返ってよりよく問題解決しようとする態度、算数で学んだことを生活や学習に活用しようとする態度を養う。

2 研究の目的

子どもたちが課題解決に向けて、人と関わり合い、協働的に学びを深めていくことの良さに気づくとともに、伝え合う力を高め、思考力、想像力を育成するために、算数科における児童の対話を中心に据えた授業実践と箕田の対話のスタイルを探る。

3 研究の仮説

問いに対する答えが明確である算数科を窓口にすることで、子どもたちが答えまでの過程を楽しみ、協働的に学ぶ喜びを感じられやすいと考える。また、効果的な対話をするにより、思考力、想像力を育成し、自分の考えが広がり、深まることで、より自分の思いや考えが整理されていき、新しいことを発見し、よりよいものを生み出していくことができる と考える。対話をすることで、基礎的・基本的な数量や図形の性質などを見出す際、子どもたちにとってよりわかりやすいものを見出すことができるとともに、より効果的で理解しやすい数学的な表現を選択することができる と考える。 教師も楽しんで研修に取り組むことで、子どもたちも学習を楽しみやすいと考える。

4 研究内容について

(1) 「対話」とは

それぞれが思ったことを好きなように話すことではなく、学習の課題について、話し手も聞き手も相手のことを大切にし、お互いの発する言葉を理解しようとし続けることの連続であると定義する。また、相手に伝えようとし、相手の考えを聴こうとすることで、自分の言いたかったことも整理されることである。

(2) 「学びを深め合う」とは

「会話(取り留めのない話をやりとりする)」をするのではなく、「対話」をすることで、相手の考えと比較し、より自分の思いや考えが整理されていき、新しいことを発見したり、よりよいものを生み出していくことと考える。「広げる」とは、今までの自分になかった新しい考えを知ることや、自分の考えとすることを指す。

算数科の深まるとする子ども像 (学習指導要領より)

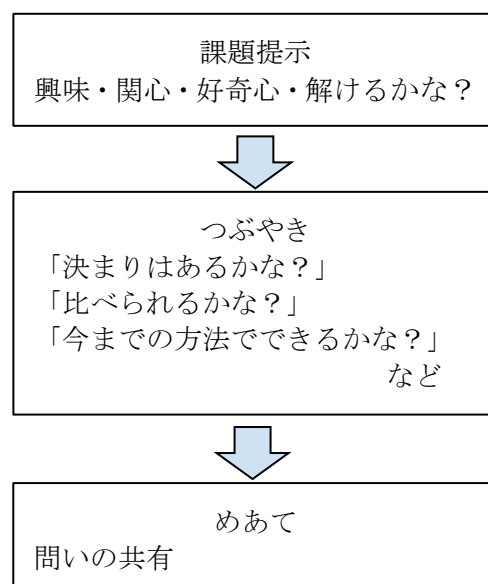
1 年	2 年	3 年
ものの数に着目し、具体物や図などを用いて数の数え方や計算の仕方を考える力、ものの形に着目して特徴を捉えたり、具体的な操作を通して形の構成について考えたりする力、身	数とその表現や数量の関係に着目し、必要に応じて具体物や図などを用いて数の表し方や計算の仕方などを考察する力、平面図形の特徴を図形を構成する要素に着目して捉えた	数とその表現や数量の関係に着目し、必要に応じて具体物や図などを用いて数の表し方や計算の仕方などを考察する力、平面図形の特徴を図形を構成する要素に着目して捉えた

の回りにあるものの特徴を量に着目して捉え、量の大きさの比べ方を考える力、データの個数に着目して身の回りの事象の特徴を捉える力などを養う。	り、身の回りの事象を図形の性質から考察したりする力、身の回りにあるものの特徴を量に着目して捉え、量の単位を用いて的確に表現する力、身の回りの事象をデータの特徴に着目して捉え、完結に表現したり考察したりする力などを養う。	り、身の回りの事象を図形の性質から考察したりする力、身の回りにあるものの特徴を量に着目して捉え、量の単位を用いて的確に表現する力、身の回りの事象をデータの特徴に着目して捉え、完結に表現したり適切に判断したりする力などを養う。
4 年	5 年	6 年
数とその表現や数量の関係に着目し、目的に合った表現方法を用いて計算の仕方などを考察する力、図形を構成する要素及びそれらの位置関係に着目し、図形の性質や図形の計量について考察する力、伴って変わる二つの数量やそれらの関係に着目し、変化や対応の特徴を見いだして、二つの数量の関係を表や式を用いて考察する力、目的に応じてデータの収集し、データの特徴や傾向に着目して表やグラフに的確に表現し、それらを用いて問題解決したり、解決の過程や結果を多面的に捉え考察したりする力などを養う。	数とその表現や計算の意味に着目し、目的に合った表現方法を用いて数の性質や計算の仕方などを考察する力、図形を構成する要素や図形間の関係などに着目し、図形の性質や図形の計量について考察する力、伴って変わる二つ数量の関係を表や式を用いて考察する力、目的に応じてデータを収集し、データの特徴や傾向に着目して表やグラフに的確に表現し、それらを用いて問題解決したり、解決の過程や結果を多面的に捉え考察したりする力などを養う。	数とその表現や計算の意味に着目し、発展的に考察して問題を見いだすとともに、目的に応じて多様な表現方法を用いながら数の表し方や計算の仕方などを考察する力、図形を構成する要素や図形間の関係などに着目し、図形の性質や図形の計量について考察する力、伴って変わる二つの数量やそれらの関係に着目し、変化や対応の特徴を見いだして、二つの数量の関係を表や式、グラフを用いて考察する力、身の回りの事象から設定した問題について、目的に応じてデータを収集し、データの特徴や傾向に着目して適切な手法を選択して分析を行い、それらを用いて問題解決したり、解決の過程や結果を批判的に考察したりする力などを養う。

5 手立て・指導について

(1) 学習意欲を高める課題の設定 からめあてへ

課題は、学習内容に応じて子どもたちの興味・関心に沿ったもの、様々な考えが持てるもの既習事項となげて考えられるもの、発展性（広がりや深まり）が期待できるものの中から設定していく。そして、子どもたちが課題解決のために、問いをもったことをすくい上げ、問いを共有し、それをめあてととする。めあてには、「？」を用いることで、まとめにつながるものとする。練習問題の際は、自分めあてとし、一人ひとりが自分の力に応じためあてを設定していく。



(2) ペア・グループ対話

子どもたちのが要性を感じられるように、すべての教科領域でペア・グループ対話を取り入れていく。対話をするときの約束を全学年で示し、本校のスタイルを確立し更新していく。

それにともなって、座席の形も目的にあったものとする。

・全員前向き→教師との対話、自分との対話、一斉に指示する場合、黒板に注目させたい場合

・グループ→班で一つのものを中心に置き、話し合う場合

・コの字→全員で対話を行う場合

・フリー→誰と話して何を学ぼうとするか選択する場合

☆対話に応じてだけでなく、子どもたちの目に何が見えて、何が聞こえるかも学習の形態を選択する際、考慮する。

箕田の話したいわ聞きたいわ
考えや思いを伝える！
考えや思いを聴く！
もっと知りたいことを尋ねる！
考えや思いを受け入れる！
わからないことを一緒に悩む！
わからないことを楽しむ！

(3) 学習形態の選択

学習に応じて課題解決に向けた学習活動の方法を学年に応じて子ども自身が選択できる余地を作っていく、高学年で学び方の選択ができるようにする。

○学習用具の選択

・ノート、chromebook、図書室の本、辞書、資料集など

○学習スタイルの選択

・ペア、グループ、複線

(4) 学習環境の充実

単元に関連する既習事項を教室掲示し、子どもの学びの手助けとなるようにしておく。

(5) ICT の活用場面を想定

単元を構想する上で、より学びが深まる方法として、ICT の有用性 {①情報を2人以上でシェアする、②情報を同じ目的（統合、分類、比較、関連付けなど）に沿って操作する} を引き続き探っていく。また、系統的に ICT の使用方法を学ぶことで、高学年で、今の自分や目的に合った手段を考える際、ICT 利用を選択肢に入れることができるように、技術をつけ有用性を体験させる。

(6) 子どもと教師の対話（教師の言葉へのこだわり）

学習中の子どもたちのつぶやきを広げ、学習を組み立てていく。教師が「わかった？」「できた？」と聞く場合、わかっていなくても「わかった。」と子どもたちは話す。子どもたちがつぶやける学級の環境づくりをもとに、つぶやきをコーディネートする教師の力量を日々高めていく。引き出したつぶやきやそのつぶやきをどう活かしていくかを蓄積していく。

毎学期更新してはる

箕田流教師の対話術（日々更新）	
「わかった？」「できた？」は子どもの口から	子どもたちの自由なつぶやきの保証を邪魔してしまう場合がある。
わざと間違える	子どもの考えにズレを持たせ、疑問からさらに思考を促す。
「〇〇さんの気もちわかる？」	発表の苦手な子や、考えを最後まで言いたい子の様子から、全体に返すことで、思考を促し、クラスのなかまの思いを大事にし想像していく。

（７）ふりかえり活動の充実

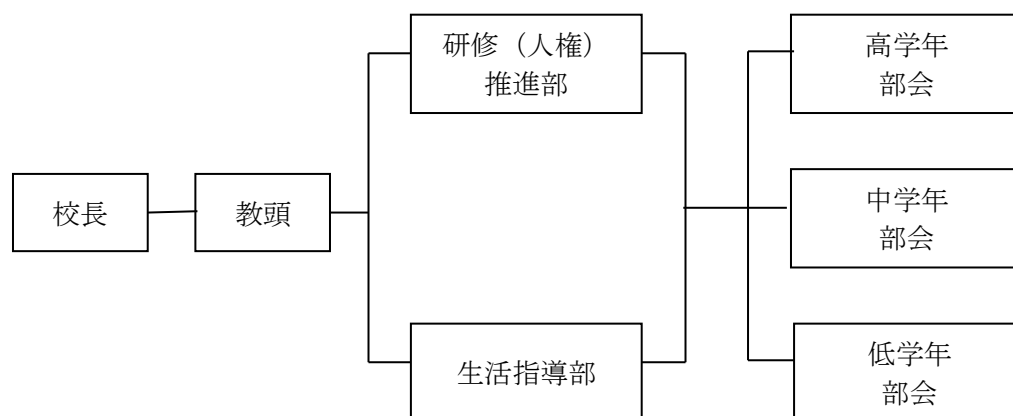
非認知能力の育成

「やりぬく力」「自制心」

低学年５分 中学年 １０分 高学年最後の１０分

算数科の授業の最後に１時間の学びと対話はどうだったのか、考えを整理したり、新しい課題を発見したりする時間を設ける。また、単元の初めや単元の切り替わりの時間に非認知能力である「やりぬく力」「自制心」の個人の目標を設定し、同時に毎時間子ども自信が評価していく。評価項目やふりかえりの仕方は、全体研修会で学年部で更新していく。

6 研修組織



（１） 研修委員（研修推進部会）（◎部長 ○副部長）

１年 丹賀 ２年 中島

６年 ◎有馬 谷 専科 中村（安）

（２） 研究授業について

年間２本、授業の公開授業を行う。

全体発表 → ２グループから授業提案を１本ずつ行う。

事前検討＆事後検討を行う。

指導主事の先生に来ていただく。（２回）

人権発表 → 1 本

(人権の全体研 1 本【校区人権公開授業】)

事前検討&事後検討を行う。

①研修計画の中で特に学びたいことでグループをつくる。

それぞれが今年度の研修で学びたいことを考え、それが似ている教師どうしでグループを組み、授業提案を行う。自分が特に学びたいことは何かを考えることで、研修の内容が明確になり、より主体的に取り組むことができる考える。グループ分けは研修会のなかで教師同士が対話をして決める。また、年度途中で学びたいことが変化した場合、他のグループへ移動したり、新たなグループを作ったりする。月に一度グループで集まって検討する。

対話の取り組み方グループ ◎中島 丹賀 黒田 谷 西岡

子どもの姿からの課題設定

学びの深まりグループ ◎有馬 市川 近藤 田畑 熊本 中村

②指導案について

全体発表は教材解釈や指導についてなどもつけて指導案を作成するが、重要な点のみを簡潔にまとめる。

学年部内発表をする場合は、本時案のみの略案で構わない。

作成時に、各学年や学年部などでの話し合う機会を大事にする。

③まとめについて

年度末に指導案に、成果と課題をつけて作成する。

7 その他

(1) 見合いっこ授業（教員の授業力 UP）

①経験年数 5 年以下研、師範授業形式（授業者の見方・考え方）全体研以外に校内で公開授業を行う。

②自分用の本時の指導案を授業の直前までに配付する。（形式は問わない）

③実施日と教科については、1 週間前までに予告する。

(2) 基礎学力をの定着

①補充学習「みだっこタイム」について

時間・・・基本は月曜日の朝 8：25～8：40

*必要に応じて放課後の時間を利用し補充学習を行う。

(放課後は 5 限で下校する学年の担任に補助を依頼できる。)

対象・・・全学年

内容

- ・基礎学力の定着を図る。今年度は算数の計算に限らない。既習内容の復習中心。
- ・ボランティアさんは依頼しない。

②読み・書き・計算「ゲット ベーシック」

- ・毎日5分（行事の日は除く）、学級に応じた時間でプリント学習やドリルパークに取り組む。

③自主学習（チャレンジ学習）について

- ・チャレンジ学習ノートを購入する。
- ・「週1回は提出する」

などまとめる媒体や取り組ませる頻度・方法は各学年で相談して決める
→月に1度それぞれの学年から一人選び、通信として発行する。

（３）読書環境の整備

- ・図書担当と連携して行う。
- ・木曜日に朝の読書時間、またはボランティアによる読み聞かせを実施する。

（４）年間学習計画一覧表について

昨年度の年間計画を参考にして、各学年で作成する。→ 担当でまとめをする。

（５）モジュール学習について

火、水、金曜日8：25～40に、15分間のモジュール学習を行う。

原則は、国語を中心に授業内容を進める形で実施する。ただし、行事の前など特別な場合はこれに限らない。

（６）情報モラル教育の推進について

スマートフォンやSNSなどが児童生徒に急速に普及しており、これらの利用によってトラブルや犯罪に巻き込まれる事例が発生している。こうした背景を踏まえ、児童生徒が犯罪被害などの危険を回避し、情報を正しく安全に利用できるようにするとともに、人権などの自他の権利を尊重し、情報社会での行動に責任を持ち、健康に留意して情報機器を利用することができるようにするため、情報モラル教育の充実を推進していく。その中で相手を意識した意思の伝達をより心がけられるような働きかけを大切に指導していく。

（７）リビングタイム箕田

教員の授業力向上や働きやすい職場づくりを目的に、月に1回自由参加で研修を行う。

算数の教材研究や授業規律、保護者対応など、時期に応じて担当がテーマを決める。
あるいは、話したい内容がある場合、誰が決めても良い。

8 年間研修実施計画

	取り組み	月	全体研修の内容
一 学 期	・本年度の研修内容を学校教育目標と照らし合わせ、生活指導、人権教育との関連を図りながら吟味 ・今年度の研修の方向性、その系統性の確認 ・日常の授業の充実（研究主題にむけて） ・チャレンジ学習（主体性の育成） ・補充学習「みだっこタイム」 ・実践の記録を残していく（成果と課題へつなげる） ・定期的な自主研修の開催 ・見合いっこ授業 ・6月研究授業1本（4年）	4	・本年度の研修計画・方向性について ・人権推進計画 ・見続ける子レポート研修 ・特別支援在籍児童の情報共有 ・スタディチェック自校採点
		5	・情報モラル教育研修 ・外国につながりをもつ児童、里山の児童の情報共有 ・ふりかえりシートの作成
		6	・人権学習の交流（箕田小の課題に対して）
夏 休 み	・人権全体研「子ども理解の研修」 ・2学期教材の授業研究 → 学年を縦断した教材研究		・見続ける子レポート交流 ・2,3学期に向けての教材研究 ・全国学力学習調査の分析 ・学習の形態の系統表の作成
二 学 期	・10月研究授業1本（6年） ・人権授業（校区人権公開授業・・・6年） ・実践の記録を残していく（成果と課題へつなげる） ・定期的な自主研修の開催 ・見合いっこ授業 ・日常の授業の充実 ・チャレンジ学習 ・補充学習「みだっこタイム」	9	・研究授業
		10	
		11	・研究授業
		12	
三 学 期	・実践の記録を残していく（成果と課題へつなげる） ・定期的な自主研修の開催 ・見合いっこ授業 ・日常の授業の充実 ・チャレンジ学習 ・補充学習「みだっこタイム」 ・成果と課題の検討 及び 一年間の研究紀要の作成 ・一年間の取り組みの反省 次年度に向けて	1	
		2	・年間指導計画の見直し ・見続ける子レポート交流
		3	・研修の反省・まとめ